

病害虫発生予察情報予報第 6 号（9 月の予報）

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	9 月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)	
		平年比	前年比			
水稲 (早植え)	トビイロウンカ	多	多	150~152	 斑点米カメムシ類	
	紋枯病	並	やや多	141~142		
	斑点米カメムシ類	並	並	159~160 178~181		
水稲 (普通期)	トビイロウンカ	多	多	150~152		 トビイロウンカ
	穂いもち	やや多	やや多	135~140		
	紋枯病	やや多	多	141~142		
	斑点米カメムシ類	並	並	161~162 178~181		
	コブノメイガ	やや少	やや多	157~158		
	白葉枯病	並	並	146~147		
<p>1. トビイロウンカ（早植え及び普通期水稲） 一部圃場で、発生が急激に増加している。ただし、地域、防除歴の違い等によって、圃場での発生量は大きく異なっている。このため、発生予測図（共通図 1）を参考に、必ず圃場の発生状況を確認したうえで、本虫の幼虫ふ化揃い期をねらって防除を実施する（8 月 23 日付け病害虫対策資料第 7 号参照）。</p> <p>2. いもち病 一部で多発生圃場がみられる。葉いもちの発生がみられる圃場では、穂ばらみ期～出穂期の薬剤防除を実施する。穂いもちの発生が多いと予想される場合には穂揃い期にも薬剤防除を行う（令和元年 8 月 26 日付け病害虫対策資料第 8 号参照）。</p> <p>3. もみ枯細菌病 気象予報に留意し、開花期間中に降雨が予想される場合には、出穂前後 3 日の間に、本病を対象とした防除を行う。特に、本病が発生した苗床で育苗した苗を移植した圃場では、薬剤防除を徹底する。</p>						
大豆	ハスモンヨトウ	並	やや少	196~197 202~204	 ハスモンヨトウ	
	カメムシ類	やや多	やや多	197~198 204~205		
	紫斑病	並	並	191~192		
<p>1. ハスモンヨトウ 本年は圃場間で発生程度に差がみられる。各圃場での発生状況を確認し、白変葉が散見され始めたら確実に防除を行う。また、その後、新たな白変葉の発生を確認したら、追加防除を実施する。</p>						
全般 普通作	<p>1. 薬剤散布の際の留意点 薬剤散布は、周辺の環境に十分配慮し行う。特に、ミツバチの被害を回避するため、養蜂農家に農薬の散布時期等を予め伝達するなどの対応を取る。</p>					

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
イチゴ (育苗圃)	ハダニ類	多	多	209~210	 ハダニ類
	うどんこ病	並	並	199~201	
	苗立枯症 (炭疽病・疫病)	並	並	203~208	
	アブラムシ類	並	並	214~215	
	<p>1. ハダニ類 多くの圃場で発生が認められ、発生が平年に比べ多くなっている。本圃へハダニ類を持ち込まないように、定植前に防除を徹底する。</p> <p>2. 苗立枯症（炭疽病、疫病、萎黄病） ランナー切り離し後の親株は早期に処分する。併せて、発病株の発生を認めた場合は、早急に圃場外に持ち出し適切に処分する。また、苗への炭疽病の感染を防ぐため、定植前まで7~10日間隔での薬剤防除を継続する。</p>				
アスパラガス	茎枯病	やや少	並	313~314	 ハダニ類
	褐斑病	並	並	315~316	
	斑点病	やや少	並	314~315	
	アザミウマ類	並	やや少	317~318	
	ハダニ類	並	やや多	318~319	
<p>1. ハダニ類 一部の圃場で発生がみられる。多発生すると防除が困難となるため、虫見板への払い落としを行い、寄生が認められた時点で直ちに薬剤防除を行う。なお、薬剤が十分かかるよう茎葉を整理し、噴口を茎葉内に差し込む等して散布を行う。</p>					
タマネギ	<p>1. ペト病、乾腐病 ペト病および乾腐病の苗への感染を防ぐため、育苗圃の土壤消毒を確実にを行う。また、乾腐病菌については、育苗トレーに残存し次作の伝染源となる可能性が報告されているため、前年に使用したトレーは使用前に洗浄し資材消毒剤による消毒を行う。</p>				
野菜・花き 共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ)	並	並	163, 165 イチゴ：212~214 アスパラガス：247~248 アスパラガス：317, 320 イチゴ：394~395	 ハスモンヨトウ

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
果樹全般	果樹カメムシ類	並	やや少	239~242	 チャバネアオカメムシ
	1. 果樹病害 8月中旬以降曇雨天が続いており、カンキツ黒点病や褐色腐敗病、ブドウべと病等の病害が発生しやすい状況となっている。圃場での発生状況に注意し、防除の徹底を図る。				
	2. 果樹カメムシ類 発生量や飛来時期は地域や園によって異なるため、園内外をよく観察し、飛来状況の把握に努める。飛来を確認した場合は、直ちに防除を実施する（8月9日付け病虫害対策資料第6号参照）。				
	3. 夜蛾類 一部のナシ園およびカンキツ園等で被害が確認されている。夜温が高くなると夜蛾類の活動が活発になるため、果実の被害に注意する。園地周辺のカミエビ、アケビ、ムベ等は夜蛾類幼虫の食草となるため除去する。忌避灯を設置している園では、点灯時間を日没、日の出の時刻に合わせてとともに、確実に点灯していることを確認する。				
カンキツ	かいよう病	並	並	213~215	 黒点病
	黒点病	やや少	やや少	211~213	
	ミカンハダニ	並	並	234~236	
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並	229~233	
	1. 果実腐敗対策 収穫時には果実に傷をつけないよう丁寧に扱うとともに、日焼け果や裂果は果実腐敗の原因となるので取り除き処分する。果実腐敗防止対策のための薬剤散布は、収穫7~10日前に薬液が霧状になるノズルを使ってムラがないように散布する。なお、薬剤散布後に100mm以上の降雨があった場合には再散布を行う。				
2. アザミウマ類 チャノキイロアザミウマによる果実への被害を防ぐために、8月中旬~9月上旬頃の防除を徹底する。また、高温乾燥が続くとハナアザミウマ類が多発することがあるため、果実の着色始期以降、園内をよく観察し、果実での寄生または被害を確認したら、早急に薬剤を散布する。					
3. ミカンサビダニ 園内及び周辺の園で新たな被害を認めた場合は、早急に薬剤を散布する。特に、前年に被害が多発した園や放任園等に隣接する園では防除を徹底する。					
ナシ	黒星病	やや少	並	279~282	 ハダニ類
	ナシヒメシクイ	並	並	293~296	
	ハダニ類	並	並	298~301	
	1. 収穫後の防除 チュウゴクナシキジラミ、ハダニ類が多発生すると早期落葉につながるため、収穫後も圃場を観察し、これらの発生が確認される場合は防除を行う。また、ナシ黒星病の翌年の伝染源を減らすため、収穫終了後の防除を徹底する。				
ブドウ	べと病	並	並	330~332	
	褐斑病	並	やや多	332~333	
	1. 収穫後の防除 べと病等の発生が確認されているため、病害による早期落葉の防止及び園内の菌密度低下のため、収穫終了後の防除を徹底する。				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	9月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
茶	カンザワハダニ	やや多	やや多	413~414	 炭疽病 輪斑病
	クワシロカイガラムシ	やや少	並	420~421	
	チャノキイロアザミウマ	並	やや多	419~420	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	418~419	
	チャノコカクモンハマキ	並	並	417~418	
	チャノホソガ	並	並	416	
	炭疽病	並	多	408~409	
	輪斑病	並	やや多	406	
	<p>1. 炭疽病 秋芽生育中の園では、降雨が多いと秋芽でも多発する。発生園では、秋芽の充実と翌年の菌密度を抑えるため、秋芽生育期（萌芽期～三葉期）の防除を徹底する。</p> <p>2. カンザワハダニ 一部圃場で発生が多い。秋芽生育期にハダニが多発すると母枝の充実が不足するため、圃場ごとに発生を確認し、発生を認めた場合は直ちに薬剤防除を実施する。</p> <p>3. チャトゲコナジラミ 多発した茶園では、葉裏に薬剤が付着しやすいように、裾刈り等を行った後防除を行う。成虫期防除は効果が劣るため、園内の発生状況をよく観察して、成虫が見られなくなった頃（若齢幼虫期）に防除を実施する。</p>				

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平成（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
6 ページ目以降：定期調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

9月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 9 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 3 ヶ月予報（令和元年 8 月 23 日）を基に、「気温：平年よりやや高い」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3 ヶ月予報における 9 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	20	40 (24.2℃)	40	やや高
降水量	30	40 (180 mm)	30	並

Ⅲ. 9月の予報

水稻（山間早植え）

定期調査：16圃場
調査日：8月16日

【概要に戻る】



定期調査圃場の様子（早植え水稻）

1. トビイロウンカ

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 16.0%（平年2.8%、前年0%）

平年比：多<+> 前年比：多<+>

(2) 9月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

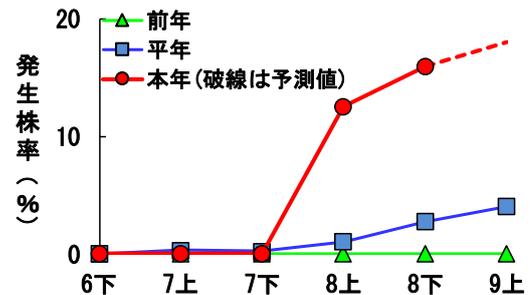


図1 山間早植え水稻でのトビイロウンカの発生推移

2. 紋枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 0.5%（平年 1.1%、前年 0.3%）

平年比：並<±> 前年比：並<±>

(2) 9月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±~+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 各圃場で発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

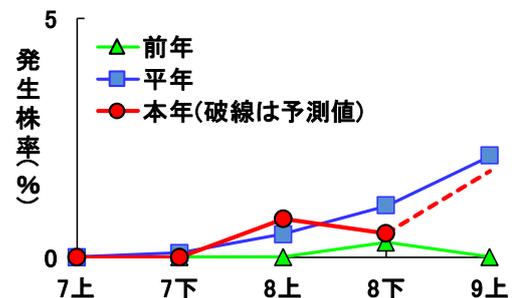


図1 山間早植え水稻での紋枯病の発生推移

3. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類、アカスジカスミカメ、ミナミアオカメムシ等）

水稻（普通期）の斑点米カメムシ類の項参照。

水稻（普通期）

定期調査：48 圃場
調査日：8月16日～22日



定期調査圃場の様子（普通期水稻）

1. トビイロウンカ

【概要に戻る】

- 1) 予報の内容
発生量：平年より多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生状況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率 7.4%（平年4.1%、前年0%）
平年比：やや多〈±～+〉 前年比：多〈+〉
 - ② 9月の気象予報
気温がやや高く、やや多発生の条件〈±～+〉
 - (2) 9月の気象予報
気温がやや高く、やや多発生の条件〈±～+〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項を参照。

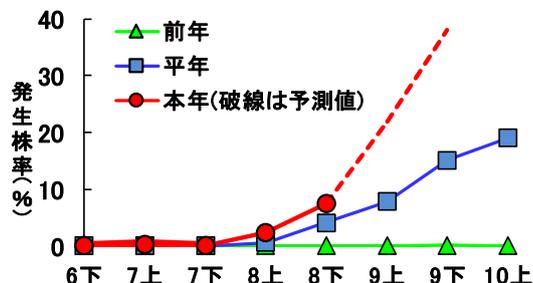


図1 普通期水稻でのトビイロウンカの発生推移

2. 穂いもち

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）【葉いもち】
 - ・発生株率 11.1%（平年13.2%、前年 7.1%）
平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉
（本年の場合、8月上旬～下旬にかけて発生株率が増加した）
 - ② 気象予報（8/22発表の向こう1ヶ月の天候の見通し）
「1週目（8/24～8/30）は曇りや雨となる」、「2週目（8/31～9/6）は平年に比べ晴れの日が少ない」と予想されており、穂いもちの主要感染時期の気象は、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉
 - (2) 気象予報（8/22発表の向こう1ヶ月の天候の見通し）
「1週目（8/24～8/30）は曇りや雨となる」、「2週目（8/31～9/6）は平年に比べ晴れの日が少ない」と予想されており、穂いもちの主要感染時期の気象は、やや多発生の条件となっている。〈±～+〉
- 3) 防除上注意すべき事項
 - (1) 特記事項参照

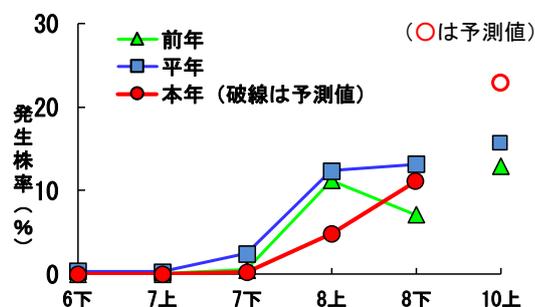


図1 普通期水稻でのいもち病の発生推移

3. 紋枯病

- 1) 予報の内容
発生量：平年よりやや多い（前年より多い）
- 2) 予報の根拠
 - (1) 発生の現況
 - ① 定期調査（図1参照）
発生株率 2.3%（平年2.9%、前年1.0%）
平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉
 - ② イネの生育状況（中晩生品種（さがびより、もち品種））
茎数 平年比：少ない〈-～±〉
 - (2) 9月の気象予報
気温がやや高く、やや多発生の条件〈±～+〉
- 3) 防除上注意すべき事項
各圃場で発生状況を確認し、病斑が上位3葉の葉鞘に達している場合は直ちに薬剤防除を行う。

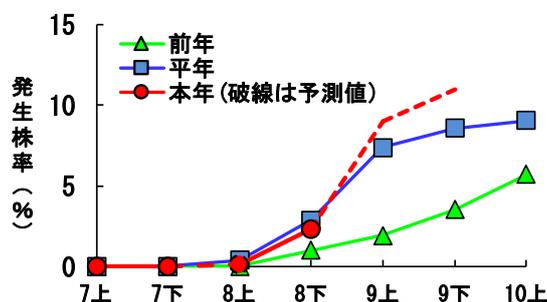


図1 普通期水稻での紋枯病の発生推移

4. 斑点米カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) イネ科植物での捕虫網によるすくい取り虫数（表1）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

(2) 9月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) カメムシ類の生息数は地域ごとに異なるので、すくい取り調査や見取り調査を行い、発生状況を確認する。穂揃い期の20回すくい取りでクモヘリカメムシが5頭以上認められた場合は直ちに薬剤防除を実施する。

(2) 多発生時は穂揃い期とその7～10日後に薬剤防除を行う。それ以外は、乳熟期（穂揃い期の約10日後）を中心に薬剤防除を行う。

表1 斑点米の原因となるカメムシ類のイネ科植物におけるすくい取り調査結果^{注1)}

調査地点	場所	草種	クモヘリカメムシ		ホリカメムシ		シホシカメムシ類		アカシジカメムシ		ミミアカメムシ
			成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫
佐賀市東与賀町	空き地	イノコウガサ類	2	1	0	0	0	0	0	0	0
伊万里市二里町	道端	イノコウガサ類	0	0	1	1	0	0	0	0	0
武雄市北方町	空き地	イノコウガサ類	1	0	6	1	2	2	2	0	0
嬉野市塩田町	空き地	ヒエ類	0	0	2	0	0	0	7	0	0
神埼市神埼町	道端	イノコウガサ類	1	0	0	0	0	0	0	0	0
吉野ヶ里町箱川	空き地	イノコウガサ類	0	2	0	1	0	0	0	0	0
白石町遠江	空き地	イノコウガサ類	1	23	0	0	0	0	0	0	0
白石町新明	空き地	イノコウガサ類	9	47	0	0	0	0	5	4	0
上峰町	道端	ヒエ類	1	0	3	0	1	0	0	0	0
本年（平均）			1.7	8.1	1.3	0.3	0.3	0.2	1.6	0.4	0.0
前年（平均）			1.6	0.7	2.1	0.6	0.7	0.9	6.0	0.0	0.0
平年（過去10年の平均）			2.3	4.3	2.2	0.8	0.7	0.9	11.0	3.6	0.03

注1) 20回すくい取り虫数(2019年8月19～22日)

5. コブノメイガ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率 2.8%（平年9.1%、前年0.4%）

平年比：やや少〈-～±〉 前年比：並〈±〉

(2) 9月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 止葉を含む上位3葉への被害を防止するため、各圃場における発生状況を確認し、発蛾最盛期の7日後（幼虫ふ化揃い期）に薬剤防除を実施する。

(2) モチ品種を中心とした中晩生品種では、上記の防除対策を特に徹底する。

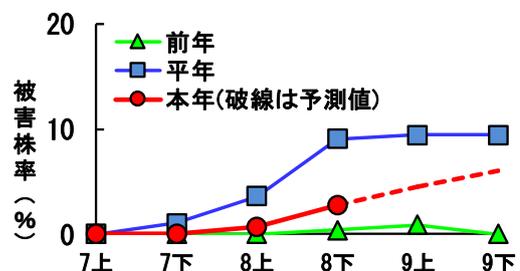
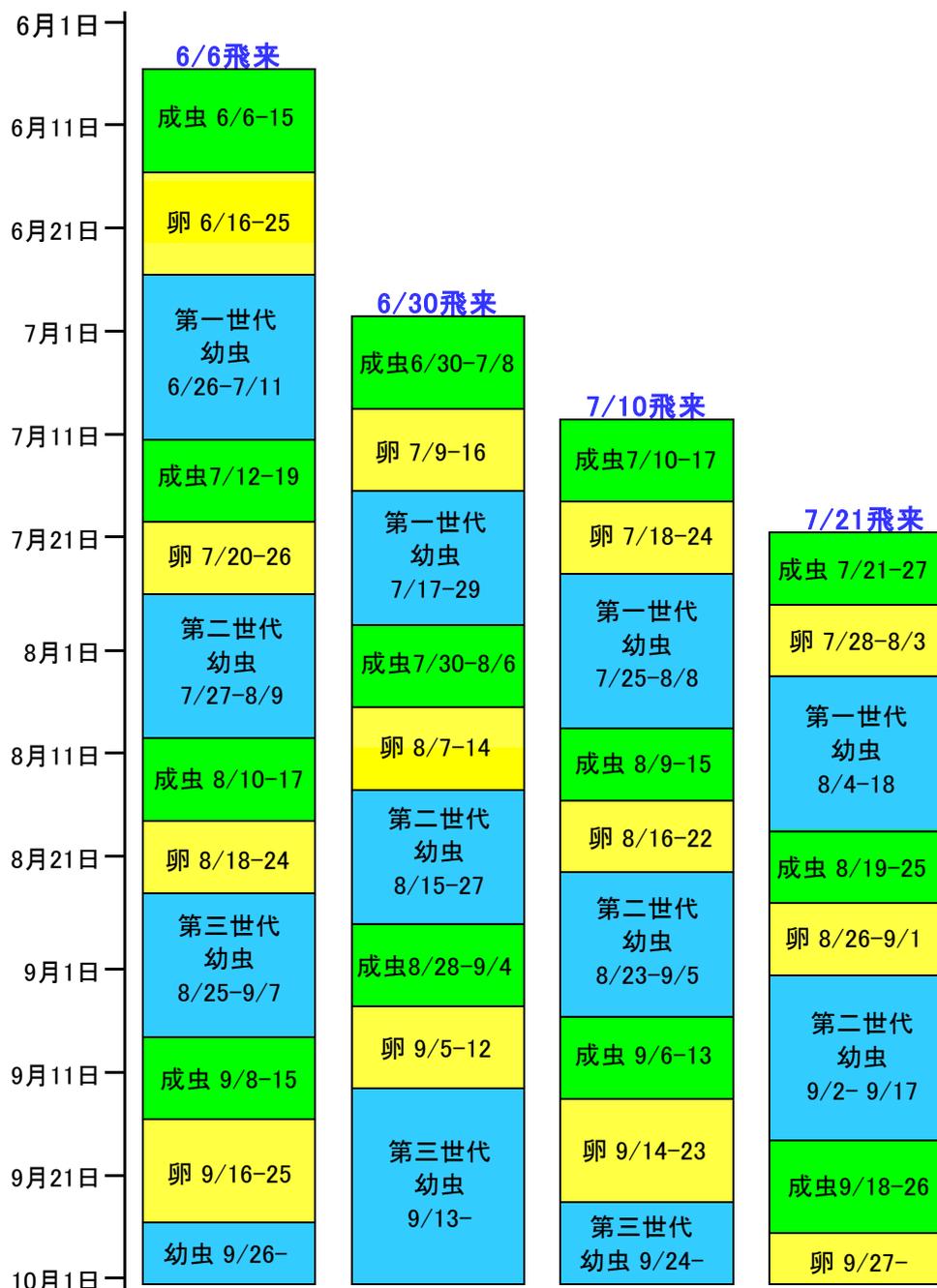


図1 普通期水稻でのコブノメイガの発生推移



共通図1 トビイロウンカ各世代の発生予測(第6版、2019年8月22日作成)

1. 6月6～7日頃(図では6月6日)、6月30日頃、7月10～11日頃(図では7月10日)、7月21日頃に飛来したウンカを起点とし、有効積算温度と佐賀市川副町の気温データ(第5版では7月31日までは実測値で以降は平年値、第6版では8月21日までは実測値で以降は平年値)を基に作成した。その結果、第6版は第5版と比べ、各飛来虫の、その後の発生時期は約2～3日遅くなった。
2. 本虫に対しては、幼虫ふ化揃い期の防除効果が最も高い。しかし、本年は断続的に飛来がみられたことから、飛来波ごとの幼虫の出現時期は異なる。
3. 普通期水稻には、6月6日飛来虫は定着していないと考えられる。この例のように、各飛来波に対する防除の重要度は、田植え時期によって異なる。
4. 田植え時期に加え、地域、水稻の品種、これまでの防除歴等の違いによって、飛来波ごとのウンカの発生量は異なるので、必ず圃場の発生状況を確認したうえで、防除対策を講じる。
5. 今後の気象経過に応じて、本図は更新する。最新情報は、農業技術防除センターのホームページで確認する。

大豆

定期調査：22 圃場
調査日：8 月 19～22 日



定期調査圃場の様子

1. ハスモンヨトウ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図 1 参照）

発生株率 0.3%（平年 1.6%、前年 3.1%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：やや少（-～±）

白変葉発生株率 0.1%（平年 0.8%、前年 0.1%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

② トラップ調査（図 2 参照）【県内 9 地点】

平年比：やや少（-～±）

(2) 9 月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

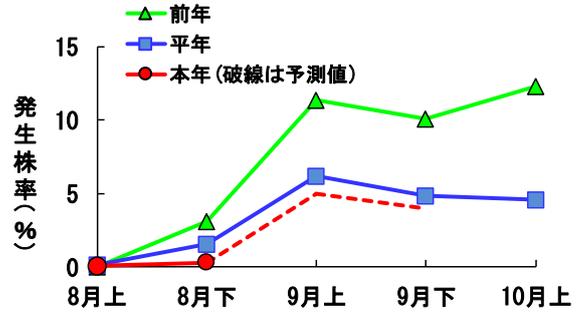


図 1 大豆でのハスモンヨトウの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除にあたっては、薬剤のかけむらがないよう規定の範囲で十分量を散布する。

(2) その他については、特記事項参照。

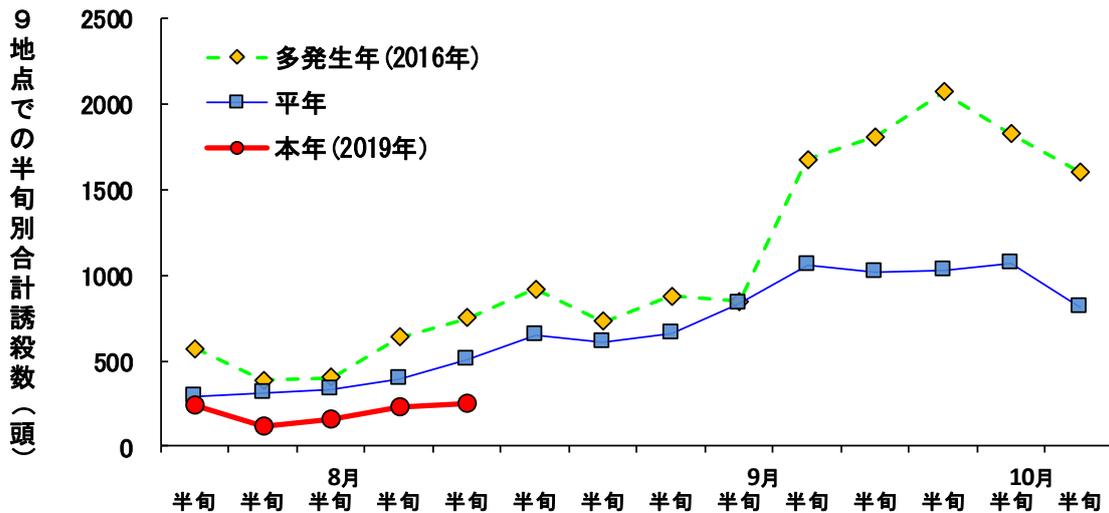


図 2 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半月別誘殺数（8月5半旬まで）
（農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内 9 地点の平均誘殺数。）

2. カメムシ類

（アオカメムシ、イモンジカメムシ、ホリカメムシ、ミミアカメムシ等）

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の実況

① 定期調査（図 1 参照）

発生株率 0.09%（平年 0.01%、前年 0%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：やや多（±～+）

(2) 9 月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

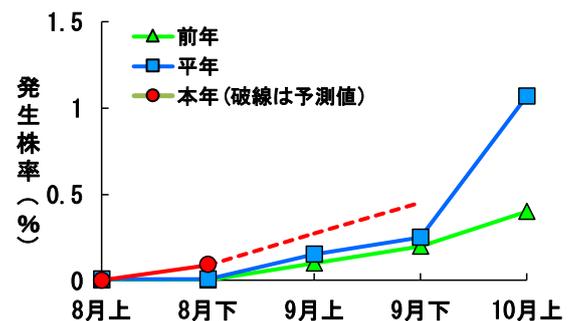


図 1 大豆でのカメムシ類の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤防除は、莢の伸長初期～子実肥大中期（9月中旬頃まで）が効果的である。
- (2) 防除にあたっては、薬剤が莢によくかかるように散布する。

3. 紫斑病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 9月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 若莢期～子実肥大中期に薬剤防除を実施する。

イチゴ（育苗圃）

（定期調査 10 圃場）
調査日：8月16～22日



定期調査圃場の様子

【概要に戻る】

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：19.2%（平年9.7%、前年9.5%）

平年比：多〈+〉 前年比：多〈+〉

(2) 9月の気象予報

気温が平年よりやや高く、やや多発生の条件〈±～+〉

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤防除の際は、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。
- (2) その他については、特記事項を参照。

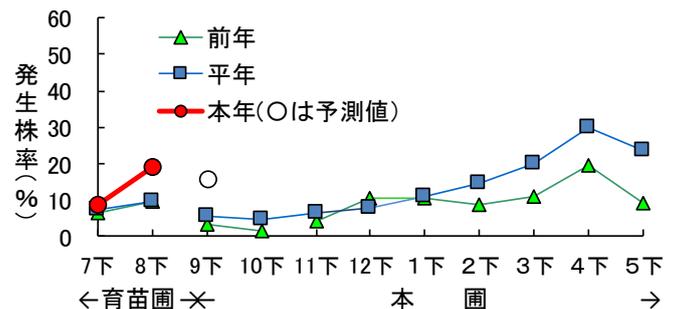


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生株率：0.4%（平年3.2%、前年0%）

平年比：並〈±〉 前年比：並〈±〉

(2) 9月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件〈±〉

(3) うどんこ病菌の苗での越冬程度

県内4地点における8月の平均気温と当年10月のうどんこ病の発生株率には負の相関が認められる。

本年の平均気温は27.9℃（8月25日現在）で、平年（27.7℃）並であり、本病原菌の苗での越冬程度は平年並と考えられる〈±〉

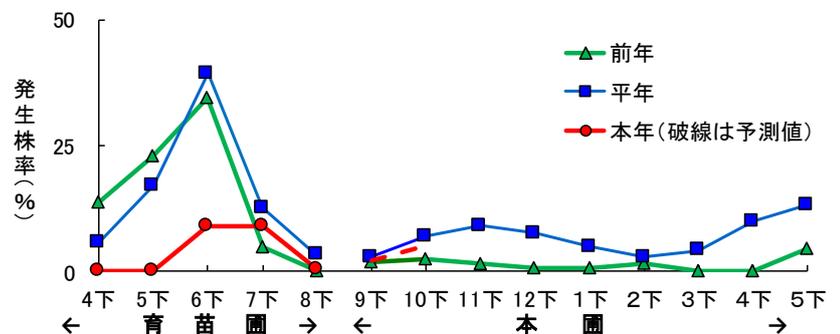


図1 イチゴうどんこ病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

(1) 感染した苗を本圃へ定植しないよう、育苗期に薬剤防除を徹底する。



アスパラガス

定期調査：8 圃場

調査日：8 月 19～22 日

1. 褐斑病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

発生茎率：13.1%（平年 10.4%、前年 20.0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 9 月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 降雨時以外は施設開口部を開放し通風を図るとともに、3 週間間隔を目安とし発生前から薬剤防除を実施する。なお、既発生圃場及び前年多発生圃場、降雨日が続く場合は散布間隔を短縮する。

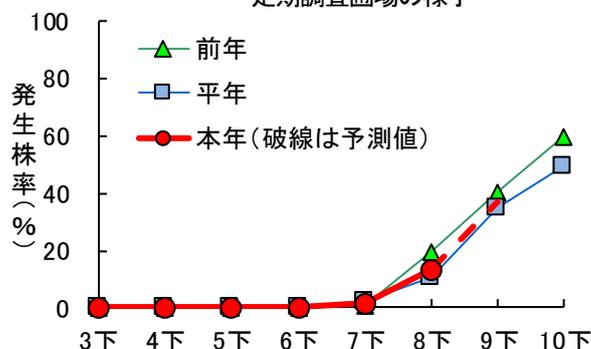


図1 アスパラガス褐斑病の発生推移

野菜・花き共通

[【概要に戻る】](#)

1. チョウ目害虫（ハスモンヨトウ、オオタバコガ、シロイチモジヨトウ）

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1 参照）

イチゴにおける食害株率：0%（平年 0.3%、前年 0%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

アスパラガスにおける食害株率：0%（平年 0.0%、前年 0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

②フェロモントラップによるオオタバコガの8月の誘殺数は、平年並（図3,4）。（±）

③フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの8月の誘殺は、平年より多い（+）

③フェロモントラップによるハスモンヨトウの8月の誘殺数は、平年よりやや少なく推移している（大豆の項参照）（-～±）

(2) 9 月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場毎の発生状況を確認し、本虫の若齢期に防除する。また、本圃定植前に苗での防除を徹底する。

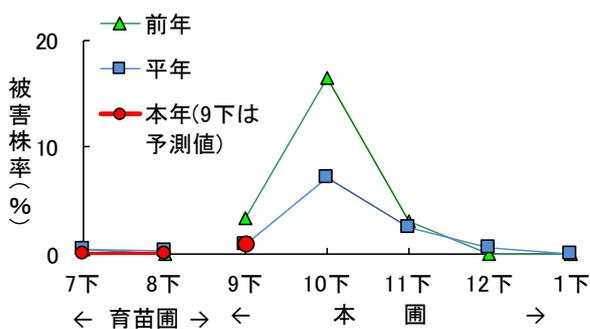


図1 チョウ目害虫によるイチゴの被害株率の推移

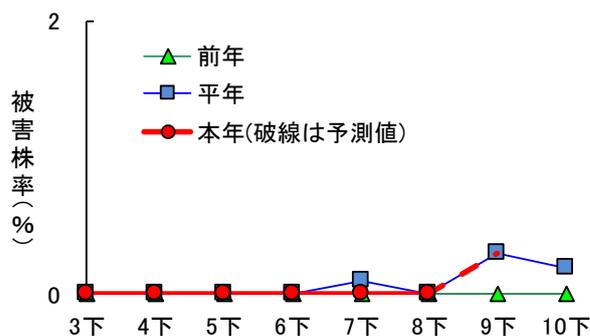


図2 チョウ目害虫のアスパラガスでの被害株率

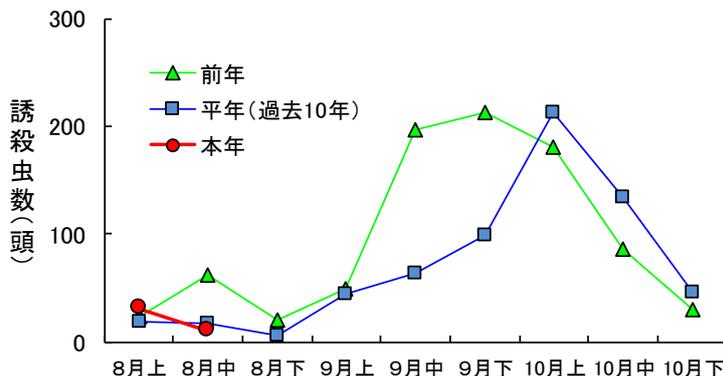


図3 フェロモントラップによるオオタバコガの誘殺数の推移
(病害虫防除員による川副町2地点での平均誘殺数)

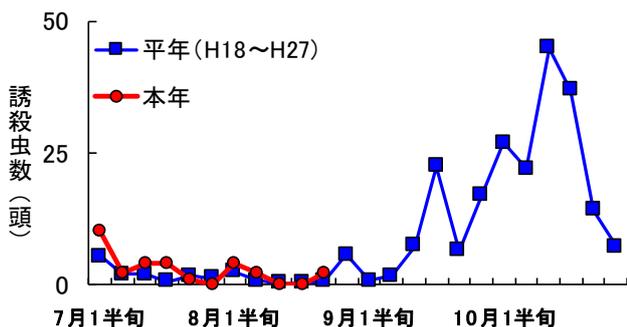


図4 フェロモントラップによるオオタバコガの半月別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

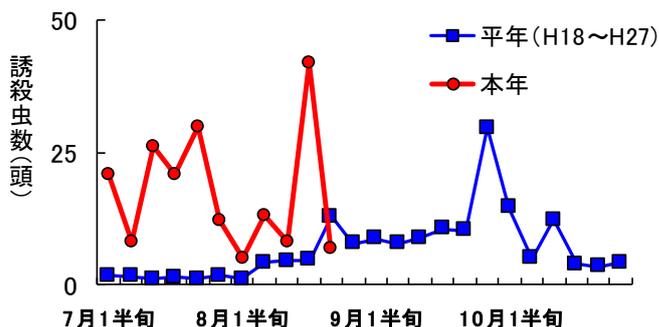


図5 フェロモントラップによるシロイチモジヨトウの半月別誘殺数
(川副町・農業試験研究センター調査)

果樹全般

[【概要に戻る】](#)

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 予察灯（図1 参照）

平年比：多<+> 前年比：並<±>

② フェロモントラップ（図2 参照）

平年比：やや少<-~±> 前年比：並<±>

(2) ヒノキ毬果における寄生数（図3、表1参照、8月16~20日調査）

成幼虫数平均：15.7頭（平年12.3頭、前年6.7頭）

平年比：並<±> 前年比：多<+>

(3) ヒノキ毬果における口針鞘数 (図4、表1参照、8月16~20日調査)

口針鞘数平均: 13.0本/果 (平年12.5本、前年27.8本)

平年比: 並(±) 前年比: 少(-)

(4) 9月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件(±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項参照。

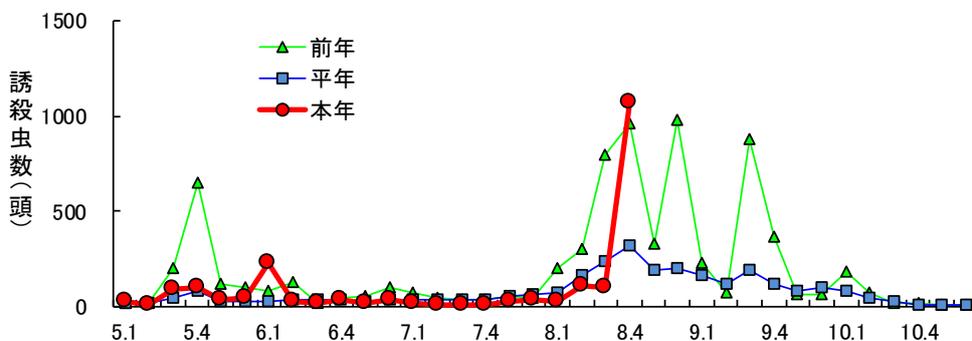


図1 予察灯 (佐賀市、太良町(病害虫防除員調査)、小城市(果樹試験場調査)) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

注) 3地点のうち、特に小城市の予察灯で誘殺数が急激に増加している。

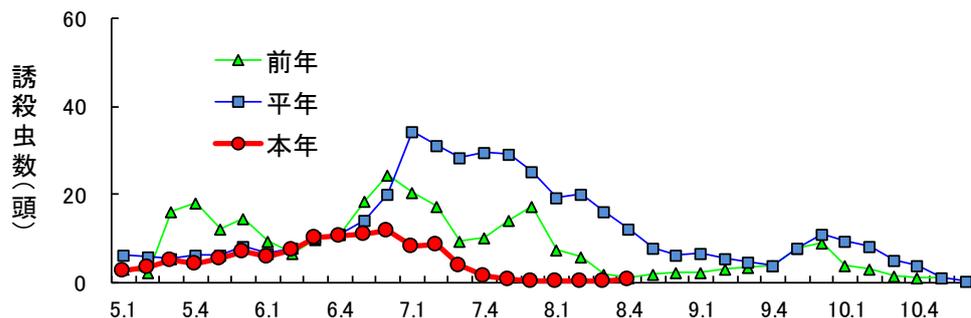


図2 フェロモントラップ (鹿島市、伊万里市、唐津市浜玉町、基山町(病害虫防除員調査)、小城市(果樹試験場調査)、唐津市鎮西町(上場営農センター調査)) による果樹カメムシ類の平均誘殺数の推移

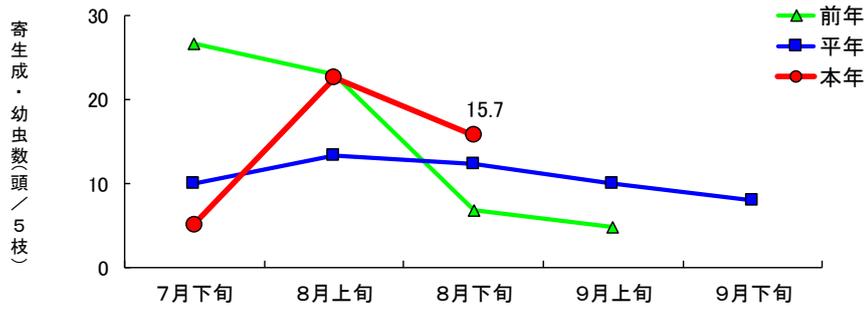


図3 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類寄生数の推移 (図内の8月下旬の数値は本年値)

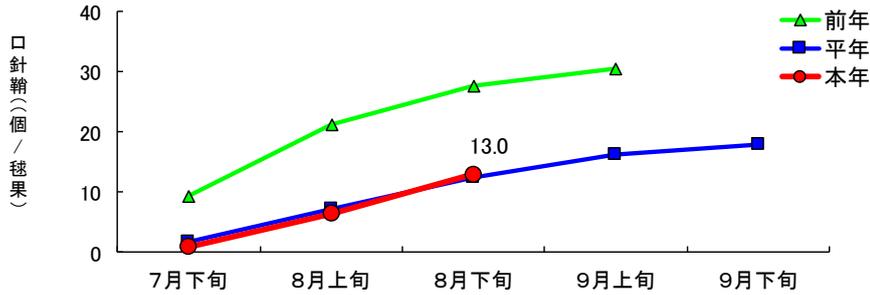


図4 果樹カメムシ類によるヒノキ毬果の口針数の推移 (図中の8月下旬の数値は本年値)

表1 ヒノキ毬果における果樹カメムシ類の寄生虫数および口針数 (図3, 4に関する地点別の状況)

No.	調査地点	ヒノキ毬果における寄生状況 ¹⁾						口針数 ²⁾			ヒノキ毬果 ³⁾ 着果程度
		8月上旬			8月下旬			7月下旬	8月上旬	8月下旬	
		成虫	幼虫	合計	成虫	幼虫	合計				
1	上峰町	2	4	6	0	3	3	1.0	4.0	4.9	中
2	神崎市	2	17	19	5	8	13	0.6	4.0	12.7	中
3	小城市	9	5	14	6	7	13	2.2	7.0	14.9	多
4	多久市	2	8	10	4	5	9	3.7	14.0	21.8	中
5	唐津市1	8	6	14	20	2	22	0.6	1.8	7.9	中
6	唐津市2	7	11	18	31	5	36	0.8	5.4	16.2	多
7	伊万里市1	4	22	26	6	6	12	0.7	2.7	10.0	やや多
8	伊万里市2	8	7	15	14	4	18	2.0	6.8	18.1	やや多
9	伊万里市3	1	12	13	11	2	13	1.5	4.4	18.3	やや少
10	白石町	23	43	66	3	12	15	0.6	15.1	18.5	多
11	鹿島市1	2	30	32	0	4	4	0.2	1.8	7.1	中
12	鹿島市2	2	1	3	11	2	13	0.0	0.2	6.5	多
13	鹿島市3	24	45	69	14	9	23	0.1	5.5	10.6	少
14	太良町1	19	13	32	14	9	23	1.1	22.7	25.0	多
15	太良町2	1	1	2	14	4	18	0.0	0.7	3.3	やや多
	平均	7.6	15.0	22.6	10.2	5.5	15.7	1.0	6.4	13.0	やや多
	平年	-	-	13.3	-	-	12.3	1.7	7.3	12.5	
	前年(H30年)	11.9	11.0	22.9	17.6	6.8	6.7	9.3	21.3	27.8	

1) たたき落としによる調査

2) 口針数が1果当たり25本を超えるとヒノキ毬果が餌として不適となりカメムシがヒノキ毬果より離脱する傾向

3) ヒノキ毬果着果程度: 福岡農総試の達観調査法(一部改変)に基づいて調査(7月下旬調査)

※ヒノキ毬果における寄生虫数、口針数は地形等により差が大きいいため、各調査地点の結果が必ずしも当該地域全体の状況を示すものではない。

カンキツ

定期調査：8 圃場
調査日：8 月 16～20 日



定期調査圃場の様子

1. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図 1、2 参照）

発生葉率：0%（平年 0.1%、前年 0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

発生果率：0%（平年 0.0%、前年 0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

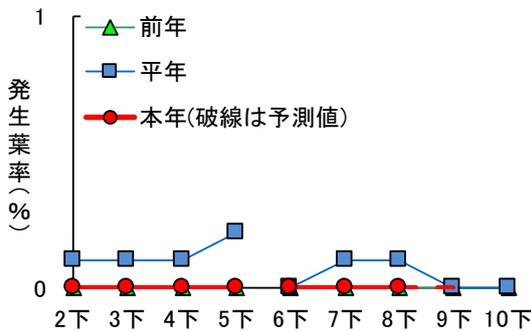


図1 カンキツかいよう病の発生推移
注) 5月下旬までは旧葉を調査

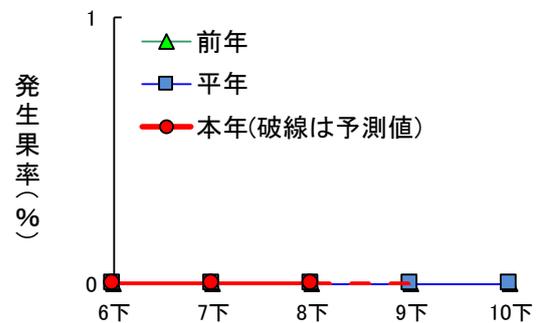


図2 カンキツかいよう病（果実）の発生推移

(2) 9月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病の発生が問題となる園では、無機銅水和剤【~~線要に戻る~~】200倍加用で定期的に防除を行う。散布間隔の目安は20～25日とする。
- (2) 無機銅水和剤にマンゼブ水和剤を混用すると無機銅水和剤の防除効果が低下するので控える。
- (3) 発病した枝や葉は伝染源となるため除去し、処分する。ただし、強剪定は行わない。
- (4) 台風の襲来等強風雨が予想される場合は、襲来7日前～前日までに必ず銅水和剤による防除を行う。

2. 黒点病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生果率：1.4%（平年 12.9%、前年 15.1%）

平年比：やや少（-～±） 前年比：少（-）

(2) 9月の気象予報

降水量は平年並で、並発生の条件（±）

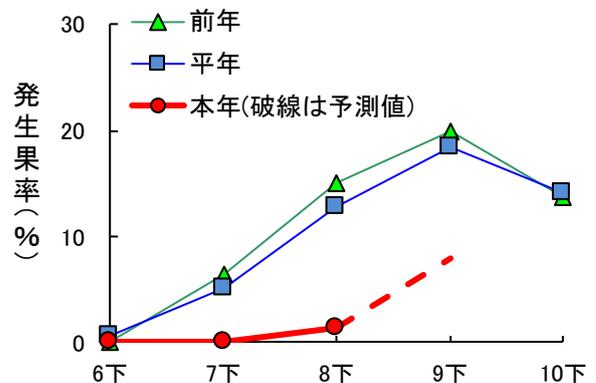


図1 カンキツ黒点病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) マンゼブ水和剤散布後の次回散布時期は、積算降雨量が200~250mmに達した時点を目安とする。ただし、同雨量に達しない場合でも、散布後1ヶ月を目途に次回の散布を行う。
- (2) 'せとが' は黒点病に非常に弱いので、露地栽培では積算降雨量150mmを次回散布の目安とする。
- (3) 枯れ枝、剪定枝、切り株は伝染源となるので除去し適切に処分する。なお、切り株の伐根が困難な場合は、ビニルの袋などで被覆して病原菌の胞子が飛散するのを防ぐ。
- (4) その他については、特記事項を参照する。

3. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：0.1%（平年4.9%、前年2.5%）

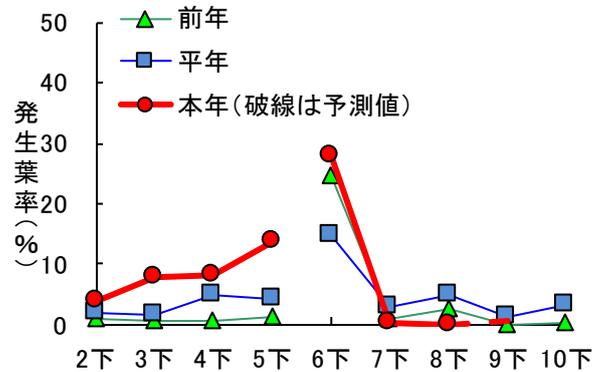
平年比：やや少（-~±） 前年比：並（±）

(2) 9月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±~+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 低密度時（寄生葉率30%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5~1頭未満）からの薬剤防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同じ系統の薬剤は年1回のみでの使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。



注) 5月下旬までは旧葉を調査

ナシ

定期調査：6圃場
調査日：8月21日

1. ナシヒメシンクイ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①ナシ園地に設置したフェロモントラップ（図1参照）

平年比：やや少（-~±） 前年比：並（±）



定期調査圃場の様子

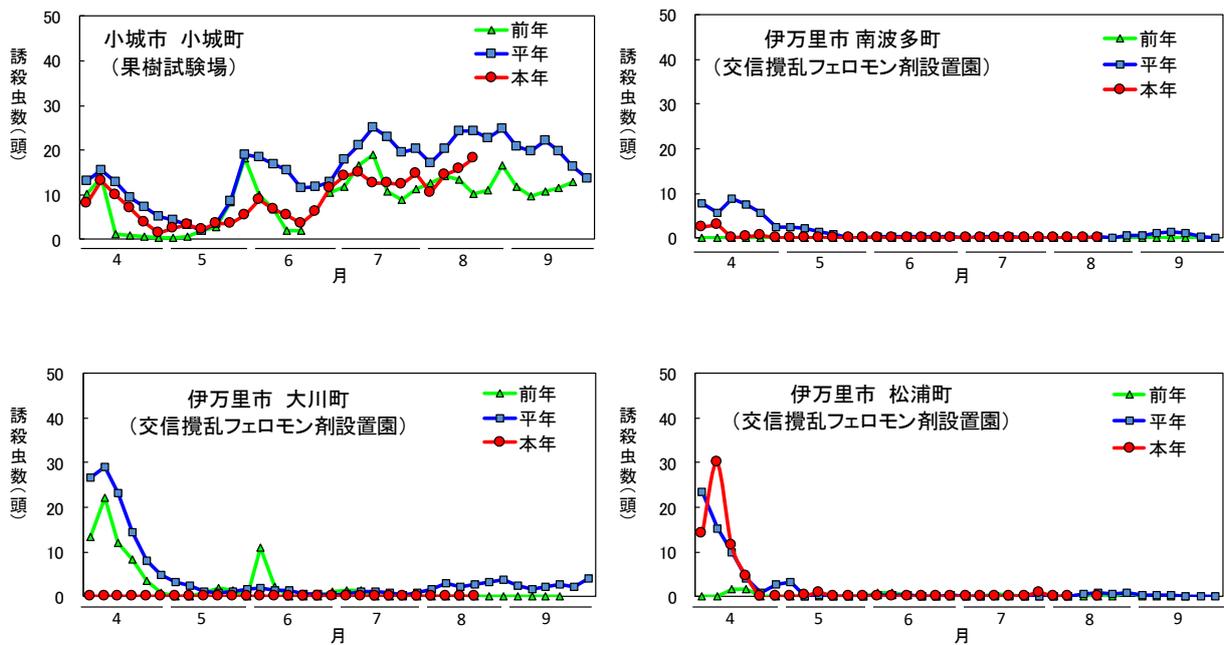


図1 フェロモントラップによるナシヒメシンクイの誘殺数の推移
(果樹試験場、西松浦農業改良普及センター調査)

②サクラに設置したフェロモントラップ (表1参照)

伊万里市 3ヶ所での8月第1半旬から第4半旬までの誘殺数は、過去3年間の値よりやや少ない(〜±)。

表1 サクラに設置したフェロモントラップにおけるナシヒメシンクイの誘殺数(頭)
(西松浦農業改良普及センター調査) ※8月1~4半旬の合計値

地点名	H28年	H29年	H30年	R1年
伊万里市 南波多町	0	0	1	0
伊万里市 大川町	53	8	13	8
伊万里市 新天町	37	40	72	17
計	90	48	86	25

(2)9月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件(±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 有袋栽培でも、果実と袋が密着していると加害されるので注意する。
- (2) 使用する薬剤の選定(収穫前日数や汚れ)には十分注意し、収穫まで7~10日間隔で薬剤散布を行う。
- (3) 交信攪乱フェロモン資材設置園においても、10~14日間隔で薬剤防除を行う。
- (4) 散布間隔が長くなると被害が多発する可能性があるため、降雨日が続く場合は降雨の合間に防除を行う。

2. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：4.2%（平年8.0%、前年17.2%）

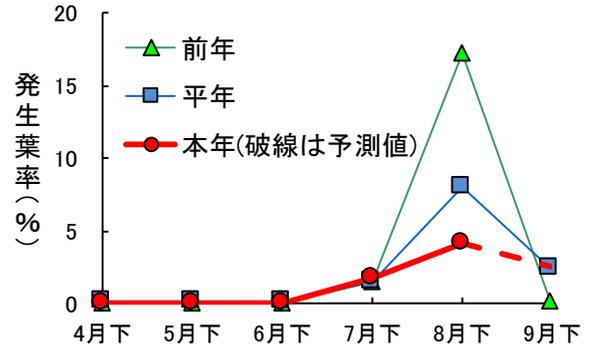
平年比：並（±） 前年比：やや少（-〜±）

(2) 9月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±〜+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) ハダニ類は高温乾燥で急増するため、低密度時（寄生葉率10%未満または1葉当たりの雌成虫数が0.5〜1頭未満）からの防除を徹底する。
- (2) 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を避けるため、同系統の薬剤は年1回の使用とする。また、前年に使用した殺ダニ剤は使用しない。
- (3) その他については特記事項を参照する。



ブドウ

定期調査：6圃場
調査日：8月16〜21日



定期調査圃場の様子

1. ベと病

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

発生葉率：2.3%（平年3.2%、前年3.3%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 9月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

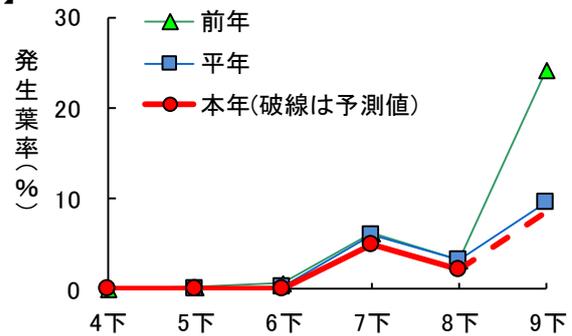


図1 ブドウベと病の発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 本病は降雨により伝染するので、降雨前の予防散布を徹底する。
- (2) ストロビルリン系殺菌剤（アミスターフロアブル、ストロビードライフロアブル等）に対し耐性菌が発生しているため、本系統薬剤は本病の防除には使用しない。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

茶

定期調査：7圃場
調査日：8月15〜20日



定期調査圃場の様子

1. カンザワハダニ

[【概要に戻る】](#)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

発生葉率: 3.9% (平年 2.5%、前年 3.0%)
 平年比: 並 (±) 前年比: 並 (±)

(2) 9月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

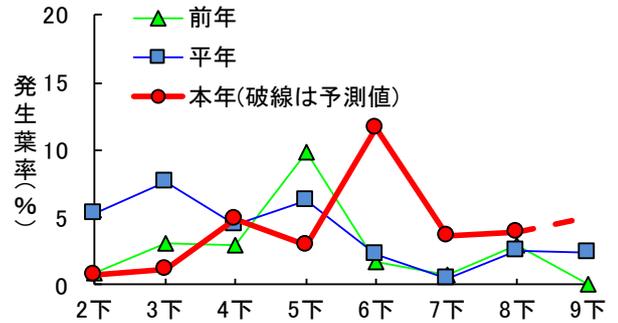


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

2. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや少ない (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1は雄繭の発生推移)

寄生株率 (雄繭): 1.0% (平年 21.6%、前年 7.9%)
 平年比: 少 (-) 前年比: やや少 (-~±)

(2) 9月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 防除適期は第三世代幼虫ふ化期の9月中下旬頃である。園内の発生状況を観察し、ふ化最盛期に薬剤防除を実施する。

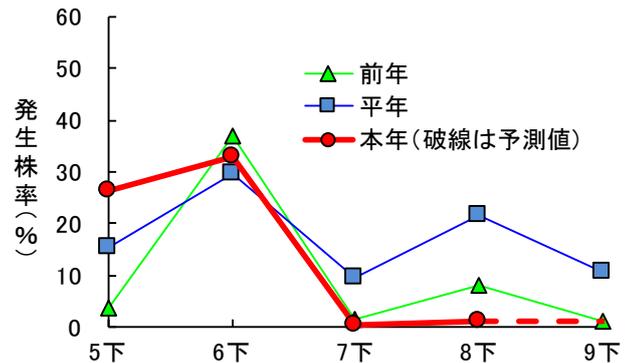


図1 クワシロカイガラムシ(雄繭)の茶での発生推移

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1 参照)

20回たたきおとし虫数: 21.7頭 (平年 33.6頭、前年 10.0頭)
 平年比: 並 (±) 前年比: 並 (±)

②吸引粘着トラップ (図2 参照)

平年比: 並 (±) 前年比: 並 (±)

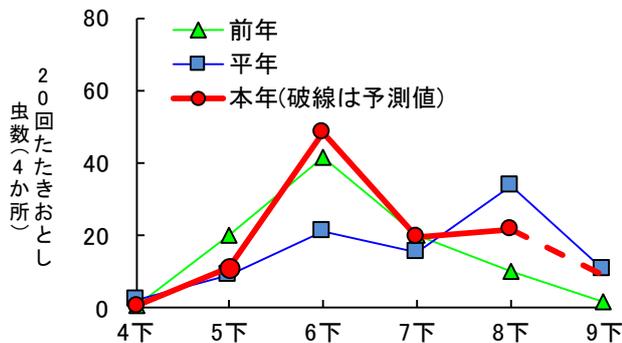


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

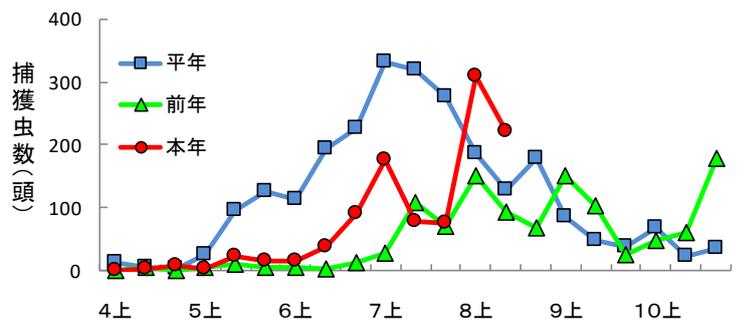


図2 吸引粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの旬別捕獲虫数の推移 (嬉野市嬉野町、茶業試験場調査)

(2) 9月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 秋期の被害を抑えるため、発生園では薬剤防除を実施する。多発生園では、さらにその一週間後を目安に、追加防除を行う。なお、同一系統の薬剤は連用しない。

4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照）

20回たたきおとし虫数：1.0頭

（平年3.0頭、前年2.0頭）

平年比：やや少（-～±） 前年比：並（±）

(2) 9月の気象予報

気温がやや高く、やや多発生の条件（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) チャノキイロアザミウマの項と同じ。

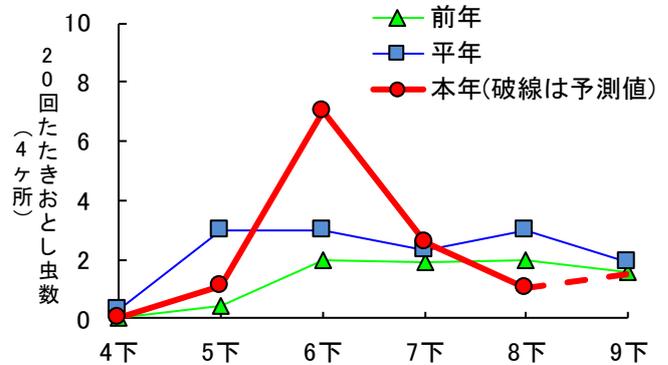


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

5. 炭疽病

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年より多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査（図1参照、H30より5月調査追加）

発生葉数：3.9枚/m²（平年4.2枚、前年0枚）

平年比：並（±） 前年比：やや多（±～+）

(2) 9月の気象予報

降水量が平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 特記事項を参照。

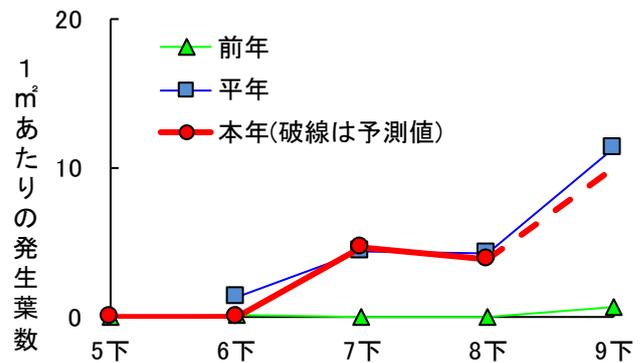


図1 炭疽病の発生葉数の推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840-2205 佐賀市川副町南里 1088
TEL (0952) 45-8153 FAX (0952) 45-5085
Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp